

この数年、要旨集の巻頭言を書く頃は、エネルギーがつきかけていて日本には何もかけそうな気がせず、後期が終わってから出かけるアジアのスラム等の現場での体験からなんらかあふれ出るものを書くというのが常であった。今年も年度の終わりには、例年通りというかいつもよりひどく疲れきっており、2月下旬からタイ、カンボジアと出かけたのだが、なかなか調子がでなかった。最後の2,3日は少々元気になったのだが、なにかそこで体験で巻頭言に書くに適したものは思い浮かばない。そこで、今回はあふれ出るものを書くというのではなく、今年度一年間日本で私がやってきたこと、苦しんできたことの一部を抜粋することによってお茶を濁したい。

上智大学は2002年から2006年度にかけてAGLOS(地域立脚型グローバル・スタディーズの構築)という名で、文部科学省のCOE(Center of Excellence)補助金を受け取っていた。私がこの数年の間、海外の貧困者の現場に行く際は、基本的にはこのお金でいかせてもらったので、何らかのまとめを提出することが求められた。そこで、私が各地の貧困者と出会いながら、また貧困者を基盤にして社会全体の変革に挑戦している人々と出会いながら考えてきたこと、すなわちPeople's Processを「貧困者の歩みの発展:新たな発展(開発)モデルを求めて:パキスタン、タイ、カンボジアの事例から」という題の文章にまとめておこうということになった。その際、予定とされていたのは24000字程度だったのであるが、どんどん書いていくうちに7万字を超えてしまった(未完成)。よって、それをさらに24000字程度に要約してAGLOS叢書<sup>1</sup>に掲載し、7万字を超える元の原稿は、別途私の他の論文等とともに一冊の本を出版<sup>2</sup>することとした。ただし、いずれも出版はもう少し後になるので、この巻頭言においては、まず原稿の「はじめに」の部分から若干を抜き出してご紹介したい。ゼミ生諸君は何度も聞いたであろうが、私の考えの中心軸をもう一度ここに明確に示しておきたいからである。

なお、まったく個人的なことを付け加えさせてもらおうと、この7万字を書きながら思ったことであるが、私が国際政治経済論<sup>2</sup>で話していること、そして今時点でもっとも私が社会に発信したいことはすべてここに書けたような気がする。つまり今の私が持っているものはすべて出し尽くした感があり、あとはこれを読んでもらえばよいわけで、これ以上大学で教鞭を握るモチベーションがかなり薄くなっている<sup>3</sup>。実際、私は2008年度にサ

<sup>1</sup> 2006年度にAGLOSが終了することを受けて、最終プロダクトのひとつとして全5冊のAGLOS叢書を上智大学出版会から出版する予定である。私の文章は第3巻に掲載予定で2007年の5月ごろ出版される予定である。

<sup>2</sup> 2008年度前半に慶応大学出版会から出版される予定である。

<sup>3</sup> それ以外にも今年は、他にも国際関係論専攻で「コスモポリス」というジャーナルを創刊し、その中に「経済学からみたグローバリゼーション」という私のチュートリアルも掲載される予定(2007年5月ごろまでに発刊予定)である。これは、私の国際政治経済論1の

パティカルをとる予定で、2007年度は上述した本を完成させ、2008年度に国外逃亡を行い、1年かけて今後の身の振り方を識別する予定である。

以下、原稿の「はじめに」から部分的に抜粋する。

『これまで数十年にわたって、全世界の発展途上国また第三世界と呼ばれる国々に対して、先進国政府や国際機関、NGOにおいて数多くの開発援助プロジェクト、貧困削減プログラムが行われてきた。しかしながら、未だに世界人口60億のうち、半数に近い28億人が1日2ドル以下、6分の1にあたる11億人が1日1ドル以下の絶対貧困と言われる生活を強いられており、中国とインドという2大大国の例外を除いては、ほぼ世界の全域で、この貧困者の数は減るどころか増加している。さらに、世界全体の貧富の格差は、拡大する一方である<sup>4</sup>。これだけ全世界で開発援助が行われながら、貧困解消があまり進んでいないのはなぜだろうか。これに対して、国際社会・先進国の開発援助プログラム、貧困削減プログラムは、先進国の人々の消費財及びそのための中間財や資源を大量かつ安価に生産する拠点としての途上国経済をグローバル経済の中に組み込むためのプログラムであって、貧困国が先進国と同じ経済レベルに発展することを、本気で貧困を無くす意思がないと言う人もいる。一方、たとえ世界全体の政治・経済構造的にはそのような位置づけであったとしても、実際に開発援助機関やNGOで働いている人々の中に本気で貧困を無くしたいと思っている人々が多数いることも事実である。しかしながら、そのような貧困を無くしたいという意思を持つ多くの人々でさえ、特に先進国の人々や途上国でも富裕層、すなわち貧困者ではない外部者の場合、何か根本的な誤解をする傾向にあるのではないだろうか。

本来、development「発展」とは、自分たちが発展していくという自発性をもったもので、今の多くの先進国はそうやって自ら発展してきた。つまり、他者が「開発」することによって「発展」するという性質のものではないのかもしれない。最近、開発援助においても「参加型開発」がしばしば提唱され、開発プロジェクトにおいて貧困者自身が参加することの重要性が言われるようになってきたが、これにしても本当に貧困者の可能性を大切にし、彼らの歩みを尊重しているとは言い難いように思う。またアマルティア・センは、貧困者を開発の対象としてみるのではなく発展の主体（エージェント）として考えることの重要性を主張している。しかしながら、実際の開発援助の現場では、貧困者自身の主体性も、よくて外部から持ち込まれた個々のプロジェクトの実施において尊重されるだけであり、発展のプロセス全体において貧困者が主体となっているとは言えないように思う。発展のプロセスを再び貧困者の視点から見直してみる必要があるのではないが。

---

授業で皆様に伝えたいと思っていることのエッセンスである。また今年度は、学内共同研究及び社会正義研究所の枠組みを使って、「野宿者問題連続講座」なるものも開催することができた。この内容も現在テープ起こしをやっている途中で、これも150ページほどの入門書としてまとめられる予定（非売品で学内共同研究から200-300部ほど作る予定。希望者は2007年度完成後に下川研究室まで）である。

<sup>4</sup> 世界人口のうち最富裕層20%の平均所得と最貧困層20%の平均所得の格差は、1960年に30倍、1991年に61倍、1997年に74倍と拡大を続けている。

そこで、実際に貧困の現場を見ると、貧困者自身の社会・経済・政治的スペースを広げ自分たちの歩みを強くする動きが力強く存在する。下川 (2007)は、この動きの特徴を、共同性が大切にされ、多くはコミュニティを基盤とした取組みであること、創造的な試みであること、貧困者同士の経験交流などの学び合いのプロセスで広がっていること、目的重視というよりはプロセス重視の傾向を持つこと、とまとめている<sup>5</sup>。しかしながら、これらは普通、多くの開発援助プロジェクトではほとんど無視され、場合によってはかえってそのプロジェクトによって潰される場合もある。本論文では、この広がりつつある貧困者自身の歩み(以後、*People's Process* と呼ぶ)の中から特に非常にメッセージ性が高いパキスタンとタイとカンボジアの *People's Process* の発展の事例を詳しく紹介し、さらにこのような *People's Process* の発展が貧困者のグローバルなネットワークを持ち、国家政策やグローバルな環境を変える可能性があることを示し、それを通して、*People's Process* の発展による新たな発展モデルの可能性を提示したい。』

なお、私がずっと展開してきた *People's Process* の発展という考え方は、ちょっと前まで私がアジアの貧困者の歩みから独自に学んだものであり、先行研究はないものと思っていた。しかしながら、今回の AGLOS に参加している先生方とのディスカッションを通して、実は偶然にも、私の考え方は上智大学に昔から流れる一つの考え方に相通じるものであることがわかってきた。その源流は、以前国際関係論専攻で教鞭をとられていた鶴見和子の「内発的発展論」である。鶴見はその著書で「内発的発展とは、目標において人類共通であり、目標達成への経路と創出すべき社会のモデルについては、多様に富む社会変化の過程である。共通目標とは、地球上すべての人々および集団が、衣食住の基本的要求を充足し人間としての可能性を十全に発現できる、条件をつくり出すことである。**それは、現在の国内および国際間の格差を生み出す構造を変革すること**を意味する。そこへ至る道すじと、そのような目標を実現するであろう社会のすがたと、人々の生活スタイルとは、それぞれの社会および地域の人々および集団によって、固有の自然環境に適合し、文化遺産にもとづき、歴史的条件にしたがって、外来の知識・技術・制度などを照合しつつ、自律的に創出される。したがって、地球的規模で内発的発展が進行すれば、それは多系的発展であり、先発後発を問わず、相互に、対等に、活発に、手本交換がおこなわれることになるであろう」<sup>6</sup> と述べている。この内発的発展論は1970年代から80年代にかけて、主として近代化論との対抗関係の中で注目されたといえる。ところが残念なことに、この

<sup>5</sup>下川雅嗣 (2007)、「貧困者の現実、彼らの歩みとオルタナティブな発展 アジアの都市部の事例を中心に」、村井吉敬、デビット・ワンク他編著『グローバル・ダイナミクス(グローバル・スタディーズ叢書第一巻)』、上智大学出版、2007年出版予定、参照。これはアジアの各都市の様々な事例をもとに、都市貧困者の自立的発展を妨げる障壁を段階的に、土地へのアクセスの困難性、クレジットへのアクセスの困難性、マーケットへのアクセスの困難性、と整理しそれぞれの障壁を乗り越えるための貧困者自身の創造的な試みを簡略に紹介した上で、その特徴をまとめている。

<sup>6</sup>鶴見和子 (1980)、「内発的発展論へむけて」、川田侃、三輪公忠編『現代国際関係論：新しい国際秩序を求めて』、東京大学出版会、185-206 参照。

内発的発展論自体は80年代以降あまり聞かれなくなっている。これは内発的発展論が消えていったというよりは、地域の個性を主張する地域主義に展開していったとも言えるであろう。一方で、上智大学の中においては、石澤学長を中心にアンコールワットにおいて進められている地域住民による地域住民のための遺跡発掘や、村井先生の地域住民の視点、私のPeople's Processなど、何らかの深い共通性をもった流れが脈々と続いていると言えよう。先日、集中的に10時間ほど、AGLOS終了後、2007年度以降どうするかということについて、AGLOSに関わっている10人ほどの先生方と非常に刺激のある話し合いを持った。その中で、この上智に流れているこの相通じる考え方が意識化され、これは『上智学派』と呼べるのではないかと提起され、またその鍵となる考え方は何なのかが話し合われた。この『上智学派』の鍵となる考え方は、まずその大前提として、アカデミックな世界において、「人間の尊厳」という価値観<sup>7</sup>を中心とした倫理的基盤を明確に踏まえた社会科学・地域研究のスペースを復権することである。これは、少なくとも建前としては価値中立を目指すことが主流となっている今のアカデミックな世界、一方で日本の『国際競争力』を高めるために資する学問だけを優先しようとする現在の教育行政においては非常に困難な挑戦とも言える。社会現実から切り離された客観主義アカデミズムではなく、グローバルな規模での人間の尊厳の実現を模索する学問をめざすのである。そして、特にアジア（またはアフリカ、ラテンアメリカも含めてよいのかもしれない）の大多数の貧困者の貧困からの脱却や人々の発展・開発という文脈において『上智学派』の真骨頂は現れるはずですが、その文脈での鍵は、主体性（エージェンシー）が人間性の尊重を考えるとときに欠かせないという視点、そしてアジアは本来個人主義的ではなく共同性を大切にする文化があるということ、結果よりプロセスが大切にされ、そのプロセスがPeople's Processであることなどが鍵であると指摘された。今後、この『上智学派』なるものが日の目を見るのかどうかは定かではないが、そのような方向性の学問ができるのであれば、私自身は面白いと思うし、その方向性が長い目で見たときには絶対的に必要であると思う。またゼミ生諸君においては、学生時代にそのような方向性に若干なりとも触れたことを大切にして、将来を歩んでいただきたいと思う。

最後に、私がPeople's Processに関して考えている現時点での結論を、上述した7万字の原稿の「おわりに」から部分的に抜粋して紹介することによって、皆様への最後のメッセージとしたい。なお、「はじめに」と「おわりに」だけを紹介してその間の本文の紹介をここではまったく行わないわけであるから、脚注1、2の本が出版されたら、是非全文を読んでいただきたいと思う次第である。多くの卒業生にとっては、この本が出版されるときは、すでに、ここで展開される価値観とはまったく異なった一般社会の価値観が吹き荒れる社会でご活躍のことであろう。その中でこれらの本を読むことによって、一般社会の価値観を相対化する機会にしていいただければ幸いである。

『最後にこれらの経験から、経済のグローバル化が進展している現代においてPeople's

---

<sup>7</sup> 上智大学の建学の精神に通じるものである。

Process の発展という新たな発展モデルをどのように構築できるのかを考えてみたいと思う。これは簡潔にまとめると次のようになるだろう。「経済のグローバル化の中で、貧困者達が生き抜き、People's Process を発展させるためには、まず ローカル(地域)において貧困者に根ざした動きが強くなることである。そして それらが様々なレベル、領域においてネットワークでつながって行くこと、しいてはグローバルな民衆レベルでのネットワークになっていくことが必要である。そしてその際に、可能な限り国家や地方自治体との協力関係を模索して行くことが重要なのである。」

ローカルにおいて貧困者に根ざした動きが強くなるためには、まず各地域に質の高いコミュニティが育つことがすべての基礎である。そしてこの質の高いコミュニティとは、少数の力あるものによってコントロールされるようなコミュニティではなく、すべての人が民主的に、主体的に参加できるコミュニティである。またカンボジアの事例で問題点として述べたような外部者に対して依存的メンタリティが強いコミュニティであってはならない。むしろ「行政(外部者がやってくれるのを待ち続けるのは時間の浪費であり、自分たちで解決を見出すことができる」というメンタリティをもつコミュニティこそ質が高いと言えるだろう。次に、このコミュニティが強くなることによって人々が自分で道を切り拓いていく中でより主体的になっていくことが重要である。さらに、政治的、経済的、社会的等様々な領域における貧困者のスペース、特に意思決定に参加するスペースが拡大していくことが重要である。このスペースの拡大のためには、コミュニティが強くなるだけでなく、外部の様々な専門家の支援も重要な役割を果たすし、政府の協力も時に効果的である。もちろん、既に地域に存在しているものを大切にする姿勢、特に長いプロセスの中で様々な技術、知識、知恵を奪われてきた貧困者自身が、地域に根ざしたものを中心に再び技術、知識、知恵を自分たちのものとして取り戻し、様々な問題を自分たちで解決し発展していくようになることが重要であろう。

グローバルな民衆レベルでのネットワークの有効性は、第一に、それによって力や可能性がないと思込まされていた貧困者たちが、自分たちが貧困の状態に置かれているのは運命ではない、また自分たちの問題ではないことに気づく契機となり自信を持つことができるし、それと同時に、特に SDI の例によって示されたように国家の大きな政策変更や国際機関の働きを変えていく実際的な力を持つことがわかる。これは前段でローカルなレベルにおいて政治的、経済的、社会的等様々な領域における貧困者のスペースを拡大することについて述べたが、この貧困者のスペースを国際社会の中に創出する試みとも言えよう。第二に、グローバルな学びあいのプロセスによって、貧困者たちの経験が共有され、例えば、貯蓄グループの実践や住民自身によるスラム調査が People's Process を発展させるためには効果的であること、そしてそのノウハウ、貯蓄グループを強く安定的にするための回転基金の重要性、住民による下水道敷設や低価格住宅建設のノウハウ、土地の所有権を獲得するための様々なノウハウ、さらには、住民自身が力を持っていて、自分たちが主体であるという意識までもが共有されるようになり、あたかも草の根のグローバルスタンダー

ドが確立されていくのである。これは国際社会が考えている開発援助におけるグローバルスタンダードとは明らかに違うものである。またこのように確立されつつある草の根のグローバルスタンダードにおいては、地域性が尊重された上でのグローバルスタンダードになっていることに注意をすべきであろう。この地域性の尊重は、*People's Process* の発展にとっては忘れてはならないことであるし、最初に述べたように「多系的発展である地球規模で内発的発展」を実現するためにもこの地域性は維持され続ける必要があるであろう。

(途中省略) 以上、*People's Process* の発展という新たな発展モデルを描いてみたが、これは最初に書いたように、内発的発展をグローバル化の進展した現代に再び復活させることも言えるだろう。このような発展が進むことによって国内および国際間の格差を生み出す構造の変革につながっていくし、逆にそうでないとグローバル化の流れの中で、貧困者は排除されるか極貧の状態で固定化されるだろう。このような立場にたつとすれば、私たちは先進国中心のグローバルスタンダードとなっているような開発援助を考える以前に、各地に存在する *People's Process* を妨げているものを取り除くことをまず考えるべきではないだろうか。そして *People's Process* の尊重し、これ以上それを無視し、潰すことのないような支援を考える必要があるのではないか。また、さらにアジア、アフリカの *People's Process* の経験およびその発展から、逆に日本社会の閉塞感を打ち破る光や秘訣を学ぶ必要さえあるのではないかと筆者は思う<sup>8</sup>。』

---

<sup>8</sup>私は、日本社会はすでにコミュニティ的センスがかなり失われてしまい、また人々は主体的、創造的というよりは現在の制度に自分を合わせるだけの受動的メンタリティが必要以上に強くなり、そのためにグローバルスタンダードを過度に求め、さらに協力というセンスよりも競争が強調されすぎているような点で閉塞感に陥っていると考えている。これらは *People's Process* で大切にされていることはちょうど逆であり、そこから学ぶことが多いのではないだろうか。